
迷った時にはストレート

新夢見勇人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷った時にはストレート

【Nコード】

N2912V

【作者名】

新夢見勇人

【あらすじ】

西暦2028年。

今年の国の調査では、野球がスポーツの中で、一番好きと答えた人は90%を超えるほど、ここ何十年で野球を愛する国になった。

今では中学野球にも甲子園というものは存在していて、

毎回TV放送されている

俺山下優介は、中学春の選抜で優勝した

優陵中学へ通うことになる。

そこで待ち受けていたのは???

プロローグ（前書き）

著 新夢見勇人

ブログ

「ブログ」

今は西暦2028年。

今の日本の人口は約一億人。

今年の国の調査では、

野球がスポーツの中で、

一番好きと答えた人は90%を超えるほど、

ここ何十年で野球を愛する国になった。

その背景には、国が野球を強化競技に指定したからでもあるだろう。

今では中学野球にも甲子園というものは存在していて、

毎回TV放送されている。

「空振り三振。試合終了です。」

今年の中学春選抜優勝は、

札幌の優陵中学です。」

「すげー優陵勝った。」

俺の名前は山下優介。

「俺もそんなすげーところで野球ができるのか。」

ワクワクする。」

僕は心のそこから嬉しかった。

俺はアメリカから引っ越してきた帰国子女だ。

小学校4年生までは札幌にいたのだが、

親の事情でアメリカに行くことになった。

そこで俺は小学校1年生から野球をやっていたのだが、

2年間アメリカのメジャーリーグという

世界を知り、札幌に帰ってきた。

「明日は入学式かあ。めんどくさいなあ。」

優陵中なら授業中も野球やってるんじゃないかなあ」

ブログ（後書き）

感想はどうでしたか？

ブログにて毎日小説を更新しています。

ぜひ感想をお願いします。

<http://ameblo.jp/otama1110777/>

全ての始まり（前書き）

著 新夢見 勇人

全ての始まり

「わが校の校訓は、虚心坦懐、森羅万象です」

「zzz……。」

「おい。起きろ。」

僕は今家にいる感覚だったが、一瞬で気が付いた。

寝ているときは家にいる感覚だが、起きる瞬間に現実を

思い出すっていうあの感じだ。

入学式そうそう校長先生の話で寝るやつってのは

逆にめずらしい。

「あーつまんねー早く野球させろ。」

と結構大きな声で言った。周りの視線が痛かった。

すると起こした先生が、

「おまえ野球部入るつもりなのか。」

「そうだけど。」

「俺が監督だ。」

「へー。」

確かに。テレビで映ってた気がする。

「おまえは寝てて聞いてないだろうが、

今日明日の土曜の9時から野球部一年は適正テストするからな

グラウンドこいよ。」

「はいはい。」

ちなみに、俺は左投げ左打ち

身長170cm 体重60kg

次の日。

「ふーやっとなつた。」

学校のグラウンドは初めて見たが、

ナイター設備はあるが、サッカー型に設計されていた。

「よし。おまえが最後だ。」

グラウンドには60人近い人がいた。

半分は一年生なんだろう。

1年生は練習着を着ているから

一目で分かる。

「これから2年と1年で試合をしてもらう。

ジャッジと選手交代は俺が行う。

サインは出さない。

自分で考えるものいい。

各自で考えるのもいい。

一年はまだお互い誰が誰なのかわからないから

難しいと思うが、その辺がんばれ。」

と監督が言った。

何だそのむちゃくちゃな。

って思ったが、口には出さなかった。

「それじゃあ2年後攻だ。さっき発表した

ポジションについてくれ。」

「はい！」

野球部っぽい掛け声で9人はポジションに着いた。

「1年生は、まずピッチャー手を上げろ」

「はい。」

俺ともう一人いた。

「うーんと、入学式寝てたおまえやれ。9番ピッチャー」

「ええー。何で9番なんだよ！1番だろ！」

講義したが、無視された。

ちえ。と舌打ちして一足先にベンチへ向かった。

そして、試合が始まった。

2年生は右のトルネード気味の直球派のピッチャーだった。

一番の誰か。

三振。

2番の誰か。

三振。

3番の誰か。

三球三振。

まだチームメイトの一人の名前も知らない。

そんなんで試合ができるのだろうか。

そんな不安な気持ちでマウンドへ上がった。

投球練習を軽く済ませ、

中学校生活第一球を

ノーwindアップのダイナミックなフォームから

一番打者の先輩に投げた。

「ス、ストライク。」

「こいつ。中学校一年なのに、既に130キロ近くでてやがる。」

監督は思わず目を疑った。

全ての始まり（後書き）

ブログに載せてるんで

感想ください

俺の秘密基地の都市伝説
を検索！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2912v/>

迷った時にはストレート

2011年10月8日19時42分発行